

イギリスの力がインド平原を征服し、その君主たちを鎮圧し、ヒマラヤ山脈の麓で立ち止まってその疲れを知らないエネルギーを国内の進歩と発展に向けた時代に私は戻らなければならぬ。「山のライン」(*山の手前を意味している)は海が境界を定めるのと同様に、明白で分かりやすい辺境を形成した。南にはインドの大英帝国があった／北には好戦的で野蛮で、近寄り難く、度し難い種族がいた／そしてそのはるか先に、アジアの別の巨大な力が横たわっていた。

英印の政治家の知恵は非常に多くの合目的性の社会的集団と非常に多くの平和の保証のある状態を長い間維持してきた。狂信に駆られたり略奪に誘惑されたりした北部の野蛮人が山から降りてきて平野に侵入したとき、彼らは同等な勇気と優れた規律に出会い、算を乱して元の領域に追い返された。しかしこれは抑止力として不十分であることが判明したため、純粹に防衛的な原則は懲罰的遠征システムへと修正されなければならなかった。しかしこれは「肉屋とボルト」(*Butcher and Bolt・性交渉の後すぐに他の行動のために立ち去ること、butcher..虐殺者、bolt..逃げ出す) 政策として嘲笑された。

徐々に状況が変化するにつれて、彼らに対処する方法が変化した。懲罰的な遠征は部族民の激しい敵意を呼び起こした。インド政府はロシアの陰謀をしばらくの間に警戒して見守っていた。国境が「無住の地」のままではいられない限り、それは「大きな溝の固定」だったので全ては良好であった／しかし、いずれかの勢力が最大の権力を持つのだとすれば、それはロシアやアフガニスタンであってはならない。「我々は一旦インド政府の職務に就いたなら、いかなる代償を支払ってでも、このへんびな土地における他の権力の政治的支配の確立を阻止することを考えなければならない。」—インド政府から国務大臣への手紙、No. 四九、一八七九年二月二八日。この地域においてロシアの影響力が卓越するならば、彼らは思いのままにインドを侵略する力を持つことになり、その成功の可能性をここで議論する必要はない。アフガニスタンの影響力が卓越するならばアミールがその場の支配者になり、彼は無期限にインド政府を脅迫することが可能になるであろう。政策の変更、古い辺境ラインからの脱却は迫力を増して責任ある人々の前に到来した。今日、私たちはその変化によって生じた害悪を見ている。それを引き起こした危険は修正された。

前進を支持する意見は数年でインド政権内に着実に高まった。一八七六年に決定的な一歩が踏み出された。パシヤン部族の宗主権を獲得しようとするアミールの試みに激昂して、リットン卿の政府はカシミアを介してチトラルに手を伸ばした。その国家のメーターは名目上カシミアのマハラジャの臣下になったが、実際には帝国政府の臣下となった。公言された目的は、結局のところヒンドゥークシュの通り道の効果的な制御力の保障であった。

「一八七七年六月一日デイスパッチNo. 一七」ビーコンズフィールド公（*ベンジャミン・デイズレーリ）の有名な内閣であるイギリス内閣はこの行動を承認し、その政策を承認した。一八七九年に再び総督政府は公式デイスパッチで、その獲得の意図を宣言した。“カシミアの支配者を通じて、効果的にヒンドウークシユの通り道を制御できるそうした政治的、軍事的配置を作る力。”「一八七九年二月二八日デイスパッチNo. 四九」「もし」とデイスパッチは続ける。「私たちがこの国に対する私たちの影響力を拡大し、徐々に強化して（斜体にしたのは私である）、私たちが山岳地帯のこちら側、またはインダス川水系内への外国の干渉がありえないと断じた場合、私たちは明確で分かりやすく尊重される可能性が高い、辺境の自然な境界線を引いたことになる。」「一八七九年二月二八日デイスパッチNo. 四九」

どんな方針または意図の宣言も、これより明確ではなかったであろう。「私たちの影響力を拡大して強化する」という言葉は、野蛮な人々に当てはめた場合、究極的に併合以外の意味を持たない。こうして長い間人々の心中で熟成し、多くの小さな緊急事態や方便によって形作られ下書きされてきた、インドの平原から山岳地域への進出の計画が明確に宣言された。前進が始まった。リポン卿の総督府が終了した後、新鮮で強力な衝撃が伝わってきた。一八四年と一八五年のロシアの辺境政策の特徴であるむき出しの侵略（*アフガニスタンのパンジェ紛争・一八八五年、ロシア軍は、英国保護下のアフガニスタン北西部のパンジェに入った。しかし戦闘は小規模に留まり、ロシアの外交官はロシア帝国がこの地域へさらに侵入することはないと保証し、大規模戦闘に至らなかった。）は、それに相応した怠惰な無関心と国益への無頓着に出会っただけであった。大事には至らなかったのだが、ひよっとすると実際に罰を受けていた可能性もある。卿の後継者たちがその時代の愚行や失策を自分から切り離そうとするのは当然のことであった。反発の精神が由緒ある不介入政策の最終的な放棄につながった。「山のライン」に代わって今度はその通り道の保有を続けることになった。これがいわゆる「フォワード・ポリシー」である。ギルギット、チトラル、ジェラバード、カンダハールの辺境を獲得することを目的とした政策である。

その方針に従って、私たちは多くの辺境砦を構築し、道路を建設し、地域を併合し、国境の部族とより親密な関係を築くようになった。その政策で最も顕著な事件はチトラルの保有である。この行為を部族民は自らの独立への脅威であると感じ、そして聖職者は全体の併合への序章であると感じた。彼らが間違っていたわけでもない。それは「フォワード・ポリシー」の公認された目的だからである。すでに述べたように、チトラルの保有の結果、文明によって自らの権威を弱められることを知っている聖職者が、人々への自らの宗教的影響力を利用して全体的な蜂起を煽ったのである。

チトラルの問題を単独で議論することは無意味である。「フォワード・ポリシー」が正当

化される場合、その論理的な結果であるチトラルの併合も正当化される。枝道と本筋は共に立つか、倒れるかである。

これまでのところ私たちは前進し、抵抗されてきた。「フォワード・ポリシー」は領土の増加をもたらし、おそらくより良い辺境ラインと一戦争へのより近い道筋をもたらした。これはすべて予想されていたはずである。現在の体制は平和の可能性を排除していると言えるかもしれない。悪名高く情熱的で無謀で好戦的な民族の真つ只中に孤立した駐屯地が形成された。これは挑戦状である。それが部族民によって襲われたとき、救援と懲罰的遠征が必要になる。これはすべて認められている政策の結果であり、それを開始した人々は疑いなく予見していたはずである。要塞が不適切に構築されていることは奇妙と見なされるかもしれない。マラカンド基地のように狭苦しく／チャクダラのように見渡されて／サラガリのように側面防壁なしに／カイバルのように適切な守備隊なしに。これは副次的な問題であり、偶然である。残りの状況は故意に作られている。

国境部族間の巨大な連合の可能性は確かに考慮されていなかった。距離によって分かれ、派閥によって分かれているので、それらに一つ一つ対処できると予想していた。この点で私たちは誤りを悟らされた。

「フォワード・ポリシー」の最初の必然的な帰結であったその戦争と混乱の期間は、いずれにせよ混乱し費用がかかったことに間違いはない。経済的な観点から見ると、辺境溪谷の取引においては秩序を維持するために必要な軍事費が英国貨幣の一シリングすら決して支払われることはない。間違いなく私たちの影響範囲が彼らの存在範囲と衝突することは部族民にとって不幸なことである。軍事的な問題、純粋に専門的な問題、前進した辺境ラインが望ましいかどうかについてさえ、意見は分かれている。ロバーツ卿（*アフガン戦争に功績のあった前インド軍最高司令官）はあることを言っており／モーリー氏（*ジョン、自由党）は違うことを言っている。

「フォワード・ポリシー」に反対する議論がないわけではない。その開始に反対した多くの人がいる。今もそれに反対する人はたくさんいる／何ものも自然の辺境ラインを超えてインド政府を誘惑したことはないと考え、彼らが言ったようにすればそれは実用的で哲学的であったであろうと主張し続ける人々である。「インドの平野全体に私たちの法を布くのである。そこに私たちの知事と治安判事を置くのである／私たちの言葉は重んぜられ、私たちの法は守られるであろう。しかし海の波のように大地が立ち上がるこの地域は、敵とライバルを私たちから隔離するための嵐の海峡として機能するであろう。」

しかし、過去の論争に携わることは無駄である。現在のもので十分であり、私たちが関

わっているのは現在なのである。

私たちはルビコン川を渡ったのである。この問題について最もよく知っているすべての人々の意見によると、今では前進は撤回できない。確かに国境部族の激しい敵意、アミールの不確かな態度、さらなるロシアの侵略の可能性、インドが受ける印象を考慮すると、この判断に異議を唱えることは困難である。歴代のインド政府は、明確かつ防衛可能な辺境を見つけることの必要性を認め、歴代の英国内閣が認めていると強く主張している。古いラインは残されており、そのラインとアフガンの領土に続く前進ラインの間、そしてその南側すべてを法と秩序に従わせなければならないわけであるが、そこにはいかなる平和的で恒久的な解決の見込みもないように思われる。

私たちをこの立場に置いた責任は、「山のライン」を保持するという古い国境政策を最初に捨てた人々にある。公平なペンとより完全な知識を備えた未来の歴史家は、彼らの行いが賢明であったと断言するはずである。一方これらの偉人たちがその同時代の人々の喝采と賞賛の中で、「成功した試みの満ち潮の中で」官庁を離れたことを思い出すべきである。彼らを激しく攻撃したすべての人々についても言うべきことはそれほど多くない。決定し、責任を受け入れ、行動を弁護した人々である。しかし、一〇年前または一〇〇年前のインドの統治者はその環境についてその後継者たちよりもっと潔かったのではないかという考えに私は傾いている。

現在の私たちの情勢に戻ろう。私たちは荒れ狂う危険な海域に乗り出したのである。事象の強い流れが引き返すことを禁じている。向こう岸に到達するのが早ければ早いほど、航海の危険と不快感は早く終わる。全員が陸に到達することを切望している。コースに関する提案は数多くある。それが不可能であると言われても戻ることに固執し、いくらか行かないうちに船を沈めてしまうであろう数人の悪質で神経質な船員がおそらくいるだろうが、数で勝つことはない。彼らが事態を遅れさせている間に、潮流はより波が高くより岩が多い上陸場所に私たちを運んでいくのである。

「全力前進」と呼びかけ、リスクを問わず一気に航海を達成しようとする人もいる。しかし悲しいかな！船には石炭が不足している。そして変化する風に対して帆を広げることができ、好都合な潮流を利用できるだけであり、波が高いときには停止する必要があるのである。

しかし、賢明な乗客は航海の難しさと海の危険性を知っていながらも、操舵手に正しい不変のコースを保つよう堂々と頼むであろう。嵐や事故によって引き起こされる遅延がどうであれ、船の船首は一貫して遙かな港に向けられているべきであり、何が起こったとし

てもこの船はいつかどこかへ漂着することを期待して無目的にあちこちを漂流することは許されない、と彼は理性と正義とともに主張する。

「全力前進」の方法が間違ひなく最も望ましいであろう。これは軍事的視点である。主張されているように良い野戦軍を動員し、余裕があるときに辺境の渓谷で、そこがハイドパークと同じぐらい安全となり、文明化されるまで作戦するのである。このコースは必ずしも住民の根絶を伴う必要はない。軍事ルールは部族民の性格と理解力に最も適したルールである。彼らはすぐに抵抗の無益なことを理解し、安定した政府による富と快適さの増加を徐々に歓迎するであろう。加えて我々はほぼ即座に明確な辺境を獲得するであろう。この計画の実際の難点はただ一つだけである。しかし、それは圧倒的なものである。そしてそれは「フワード・ポリシー」全体に対する最も深刻な議論の構成要素となっている。これである。我々はそれを実行するための軍隊もお金も持っていない。

避けられない代替案が現在のシステムであり、戦争によって中断され、それが終わった時にまたそこへ戻らなければならぬシステムである／段階的な前進、部族間の政治的術策、助成金と小さな遠征のシステムである。

この政策は時間がかかり、苦痛であり、幾分威厳を損なうが、それが確実に強力ではない理由はない。しかし、それは一貫して追求されなければならない。優柔不断に強力な政策を施行することは、子供にダイナマイトを持たせるより危険である。内外を問わず、インドの統治者に浴びせられる正当な非難は、彼らが事実を認識しているにもかかわらず正当な結論から尻込みしていることである。

彼らは後戻りできないことを知っている。完全に続けるつもりである。それでも彼らは、状況を認め、率直に国の前に真相を提示し、昔ながらの民主主義の良識と勇氣に信頼することを恐れている。その結果、一八九五年のチトラル遠征に先行したような、ばかげた不必要な声明によって自らの手を縛ってしまった。辺境部族を監視する政務担当官は、厳密な規則に則りながらも、個人の人格の力によって威信を獲得すること、個性を均一性と組み合わせることを期待されている。そしてこの臆病さは、時にカイバル砦の放棄のような哀しく愚かな行動につながってしまう。

しかし、すべての障害と過失があつたにせよ、そこには確かな進歩がある。それは多くの小さな改革によって加速され、より容易になるであろう。この細部の問題は専門家の領域に非常に近いので、私は列挙したり、論じたりするつもりはない。とりわけ平時の通常の任務において政務担当官にはより幅広い権限が与えられるべきである、と提唱されている。他の人たちは部族民に自分たちが見ているものがサーカーの全兵力ではないという事

実を印象づけるため、軍隊が時々デモ行進をすることを提唱している。大胆な人は若いパシヤン人を取り込み、ローマ人の習慣に従って彼らをインドで教育することを示唆した。しかし、これはキリスト教の時代よりは古典の時代にふさわしいように思われる。

人々と国々を広く見渡してみると銀は鋼よりも良い武器のように思われる。助成金制度は部族との関係を改善し、その利権を法と秩序の側に参加させ、富を増すことよって野蛮さを減ずる傾向がある。武器の供給に関しては、政府は買い手として市場に参入し、代理人を雇って部族民よりも高い値をつけさせた方が兵士を雇うより安上がりであろう。水が低きに流れる如く、経済の法則は確実に商品を落札者に手渡すのである。この戦争には他にも間違いなく多くの教訓がある。それはイギリス人の力や勇気の及ぶ限りの、それでも長くて辛い仕事を軽くするかもしれない。

私たちはいま過渡期にあり、終了の手法も契機も見えない。しかし絶望してはならない。私にはアフガンの渓谷がしばしば完全に丘に囲まれていて出口がないように見えたことがある。しかし、縦隊が進むにつれて峠道が徐々に見え始め峠が現れるのである。険しくて困難な時であれば、敵に掌握されていて強行突破しなければならなかった時もあるが、抜け道のない谷は見たことがない。危険を知る人々の確固とした、しかし用心深い歩調で進むなら私たちは最終的にその道を見つけるであろう／しかし問題が起こったときには、その技能と規律に思いを致してそれに対処する彼らの能力を疑わないようにしよう。そのような精神で別れの一瞥とともに私はこの主題から離れることにしたい。

私が語ってきた、そして他の人々が語るであろう／大辺境戦争の記事を読んで今日、単に勇敢な兵士と苦勞して稼いだ金銭の損失を嘆くだけの人が多くいるに違いない。しかし、将来のある時代において歴史に確かな光を当て、状況全体、その原因、結果、および機会を検討する人は、おそらく深刻ではあるが悲しむべきではない他の影響を見出すであろう。一八九七年は民族のより高い運命に対するその信念を全世界に宣言した年としてイギリス人の年代記に刻まれた。ワインの泡が弾け、灯火が輝く饗宴において強者がその武勇を誇るのであれば、朝の寒さと灰色の中で自分が怠惰なほらふきではないことを見る機会があるのは良いことである。より広い知識とより発達した頭脳を持ったいまだ生まれぬ判者は最近起こった出来事の中に人類の進歩を方向付け、帝国の興廢を調整する不思議な力の影響を発見するかもしれない。そして彼は少なくともそう言われても差し支えない人々が人類に幸福、学び、自由を付け加えたと言う機会があってもいいであろう。